

特集・動き始めた伊豆観光振興
「伊豆急行と沿線地域の新たな取り組み」

地域一体となった
観光振興を考える。

伊豆は ひとつ。

伊豆急行線の終着点、伊豆急下田駅。黒船の来航で知られる開国のまち下田は、伊豆急行の開業と同時に、観光という新しい産業を得て、大きな発展を遂げてきた。美しい自然や海、良質の温泉を目当てに多くの観光客が訪れる。開国の歴史を物語る史蹟めぐりも人気だ。けれども、国内有数の観光地・伊豆の人氣に陰りが見えるいま、石井直樹下田市長は、圏域が一体となって新しい伊豆をつくり、伊豆の復権に取り組むことが必要だと語る。石井市長に、お話を伺った。

下田市長

石井直樹 Naoki ISHII

文●茶木 環／撮影●織本知之

SPECIAL INTERVIEW

幅広い世代の下田ファンをつくる

——伊豆急行が開業50周年を迎えました。石井市長は下田市ご出身ですが、開業当時の頃を覚えていらっしゃいますか。
石井 昭和36年の開業当時は、残念ながら下田を離れていました。東京の高校に通っていて、下田に帰ってきたのは二十歳を過ぎた頃でしょうか。けれども、まちの人たちが「第二の黒船」と呼んで大歓迎したというのはよく分かります。当時はバスしか交通手段がなくて、東京に行くには5〜6時間かかる。それが電車に乗って3時間で行けるのですから、夢のような話でした。

伊豆急行が開業してからは、首都圏の人たちが殺到して伊豆にやってきました。一番多かったのは海水浴客です。エメラルドグリーンの海に真っ白の砂浜が広がる下田の海水浴場はどこも大変な人気でした。

しかし、当時は観光客が一気に増えても、宿泊施設などが足りない状況でした。そこに民宿ができ、ブームが生まれ、観光施設も次々と誕生していきました。下田の主力産業が観光に位置付けられた時代でした。

当時、下田の人口は約3万人でしたが、夏の最盛期には10万人に膨れ上がる。観光客の増加に合わせて行政も、例えばそれだけの人が水道を使っても断水しないように整備するなど、基盤整備を進めていったようです。

下田の観光客の入込みのピークは昭和59年頃ですが、その年に下田の海水浴場

に訪れた人は総計で170万人を記録しました。首都圏の人にとって、下田に海水浴に行くというのは、夏の最大の楽しみだったんですね。私も、高校時代はすぐくモテました。いや皆、夏休みに下田の私の実家に遊びに来たいからなんです（笑）。

いまは海水浴離れが進んで、下田でも海水浴客が65万人程度まで減少しています。都内の旅行代理店の方々とお話ししても、半数の方は下田に海水浴に来たことがないと言う。とても残念に思います。

——現在の下田観光は、どのような楽しみ方が人気を集めていますか。

石井 幅広い年齢層の方々が関心を持ってくださるのは、やはり下田の歴史です。



昭和40年代の伊豆急下田駅（写真提供／伊豆急行株式会社）

特集：動き始めた伊豆観光振興

[伊豆急行と沿線地域の新たな取り組み]

時間をかけてゆっくり旅行を楽しみたいという、年齢的には中高年の観光客が多いのですが、最近では若いお客さまも増えています。

下田は、鎖国時代から明治維新につながる重要な歴史の舞台です。市内の史蹟を回ってみると、ペリー提督や黒船、吉田松陰先生やタウンゼント・ハリスなど、誰でも耳にしたことのある名前が次々と登場します。例えば、坂本龍馬に関しても、船で坂本龍馬と下田にやってきた勝海舟が、脱藩の罪を背負った弟子の身を案じて、下田に滞在中の山内容堂公に「龍馬を赦してやってくれ」と願い出、あの龍馬は下田から大きく羽ばたいたのです。そんな説明を聞きながら下田のまちを歩いていると、どんどん興味が広がって、もつといろいろなエピソードを知りたくなります。

また、下田は長崎を別として日本初の国際港です。まさに下田から文明が開化した。アメリカ最初の領事館が置かれたのもここ下田です。

下田市ではボランティアガイドが活躍していますが、ガイドさんは皆さんとても勉強熱心で、興味深いエピソードを交えながら非常に楽しく案内してくださっています。歴史という切り口で下田の魅力を情報発信していけば、下田に来てくださる観光客はまだまだ増えるんじゃないかと考えています。

——また下田に来て、いろいろなことを知りたいという方も増えるのでは。

石井 そういうリピーターをいかに増やしていくかが、これからの観光地にとっ

て重要なことではないでしょうか。「1回行ったことがある」というのではなく、何度も来てくださったたり、下田の魅力をいろいろな人に伝えてくださる——そんな下田ファンを増やしていくことが大切だと考えています。

——昨年、東日本大震災で中止となった「黒船祭」は今年も5月に開催されます。

石井 ええ。今年は、東日本大震災の被災地支援活動に尽力した在日本米軍など関係機関への感謝、そして復興をテーマにしています。

日米友好の証として昭和9年に始まった黒船祭は、今年で第73回を数える下田の伝統行事で、在日本米軍、自衛隊、それに海上保安部や警察の協力を得て開催しています。

昨年、東日本大震災が発生して、在日本米軍も自衛隊も、ただちに被災地に駆け付けました。黒船祭はすぐに中止が決めりましたが、被災地の映像を見ると、長年、黒船祭を一緒にやってきた人たちも、懸命に支援を行っています。私どもも義援金を送るなどの支援に取り組んでいますが、それだけではなく、過酷な被災地で懸

命に支援に取り組む彼らにこそ、きちんと感謝を伝えなければという思いが日増しに強くなってきました。今年の黒船祭のテーマは、そうした経緯から生まれています。

被災地からは、岩手県の山田町から100人、大槌町から30人を招待しています。また、ルース駐日米国大使ご夫妻も参加くださいます。

被災地支援活動に携わったすべての人々に感謝の意を示し、下田から皆で復興に向けての雄叫びを上げようと考えて

います。

——もう一つ、新しいニュースとして、下田を舞台にしたアニメが放映されるとお聞きしています。

石井 下田で暮らす女子中学生4人のひと夏の物語、アニメ「夏色キセキ」が4月から放映されます。プロデューサーは「二つのまちにこれだけ宝物が集積している場所はない」と、ドラマの舞台を下田に設定したそうです。

アニメのモデル地を探訪することが流行になっていると聞いています。アニメ





1



2



3

1 標高200mの寝姿山山頂から下田のまちを望む(写真提供/下田市) 2 ベリー一行が上陸後、糸約締結のため了仙寺に向かって歩いた道は「ベリーロード」と名付けられている 3 ベリーが上陸した地点には、胸像と錨による「ベリー艦隊来航記念碑」が立つ。錨は米海軍から寄贈された

もともと下田が観光地として栄えてきたのも、先ほど申し上げたように、伊豆急行が開業し、JR東日本の東京駅と下田がダイレクトにつながったからです。昨年の震災

に登場するスポットを回る、そんな新しい楽しみ方もできるようになるのではないかと地元でも期待しています。

地域の宝を見つけて育てる

——伊豆急行では開業50周年記念事業の一つとして伊豆高原駅に下田太鼓祭りの「太鼓台」を展示しています。これは、どのようなお祭りなのか。

石井 毎年8月14・15日に行われるもので、正式名は「下田八幡神社例大祭」といいます。伊豆半島の中でも有数の規模を誇り、その威勢の良さとはかに例を見ない御神具が特徴です。400年の伝統を守り、いまなお観光イベントとは一線を画して神事として執り行われているのも大きな特徴ですね。昔ながらの日本の祭りの風景を体験しに、ぜひ下田に来ていただけるようにしたいと考えています。

伊豆急行の福島社長も同様の思いを持たれていると思います。この太鼓台の展示も一例ですが、いまの伊豆急行は、沿線の各エリアにお客さまを呼び込む方法を考えてくださっています。これはとてもうれしいことで、私もそれに応えていかなければと思っています。

後計画停電で直通電車が不通だったときは、下田の観光客数が激減し、鉄道の重要性をあらためて実感しました。鉄道あつての伊豆観光です。私も電車に乗って終点の伊豆急下田駅まで来てもらえるように、魅力ある下田のまちづくりに努力しなくてはいけないと思っています。

——伊豆急行が沿線の観光資源の掘り起こしを始めたことについては、どのように受け止めていらっしゃいますか。

石井 伊豆急行が観光地の在り方というものをどのように考えているかは、沿線にとっても大変重要なことです。

伊豆急行が地域の宝を探して「こういうものを育てていけばお客さまが来る」と提案してくださったら、行政としてもその可能性を検討し、実行していきたい。地域を代表する企業と行政とが目的を同じにして、ともに進むことはとても大事なことです。伊豆急行が沿線の活性化に取り組み委員会を組織して、活動を

開始したことを歓迎しています。

——伊豆急行と行政とが一体となつてできる取り組みとして、何かアイデアはありますか。

石井 沿線の風景づくりにについては、行政も協力することができると思います。例えば、稲梓駅近くの竹林をきれいに整備して光が入るようにすると、京都の竹林のような景色を車窓から楽しめるようになるのではないのでしょうか。山の景色が続く場所には何か花を植えるといいでしょう。車窓から見える景色が場所ごとに変化すると、電車に乗るのがもつと楽しくなります。そういう取り組みを、行政と伊豆急行とが一体となつて始められたらいいと思います。



下田太鼓祭りは、応神天皇を祭神とする下田八幡神社の例祭。祭典の様子は、下田奉行・今村伝四郎正長公が制定したと伝えられる。400年の伝統を持つ(写真提供/下田市)

特集：動き始めた伊豆観光振興

[伊豆急行と沿線地域の新たな取り組み]



「黒船祭」は、黒船の来航と開国を記念した下田最大の祭典。「幕末タイムスリップ」をテーマに、まち全体が開港当時の情緒で彩られる。米海軍、海上自衛隊の音楽隊が出演するパレードやコンサート、会場花火大会など国際色豊かなイベントが開催される。(写真提供/下田市)

第73回黒船祭

2012年5月18日(金)～20日(日)

特徴も出てくるでしょう。観光のお客さまは楽しむことを目的にお越しなので、車中の時間ももっと楽しんでもらえるように工夫したいものだと思います。

伊豆圏域で一体となった取り組み

——これからの伊豆の観光づくりについて「ご意見をお聞かせくださいませんか。」
石井 これからは、地域単位ではなく伊豆圏域、広域での観光振興の取り組みが必要だと考えています。

河津町の「河津桜」の人気は、周辺の下田や稲取などにも観光客を呼び込んでいます。河津桜のシーズンに花見客をお迎えして、下田や稲取ではどうおもてなしをするのか、そういう面での広域の連携を大切にしていきたいと思います。

実は河津桜は、河津町だけではなく、下田を飛び越えて南伊豆町にも植えられているんです。12年前、私が市長になったとき、「下田にも河津桜を植えよう」と提案したことがありました。市民から「ほかのまちの真似をしないで下田オリジナルの桜をつくったほうがいい」と反対されて頓挫しましたが、その後、河津桜はほとんど県外に出荷されて、神奈川県松田町や三浦市など、いろいろなところが河津桜の名所として知られるようになっていきました。あのとき、河津桜を下田に植えておけば、いま頃は「河津桜の里 河津・下田・南伊豆」というように、ひとつの広い面としてPRすることができました。

私はいまからでも遅くはないと思っています。これから、それを始めればいい。ほかにはない規模の河津桜の里をつくり、宣伝も誘客も共同で行う。河津や南伊豆の町長と話をしているところです。

河津桜に限らず、伊豆と同じ素材で売っている観光地はほかにもたくさんあります。稲取の雛のつるし飾りも、福岡県の柳川市や山形県の酒田市だけではなく、いろいろなところで打ち出しています。ですから、稲取ならではの付加価値

をつけないと、観光客を呼べません。ひとつの地域ではできないことも、広域で力を合わせれば、ほかにはない付加価値をつくることができます。そうした取り組みをしていかなければ、観光地としては生き残れないと思っています。

——今後の発展については、どのような期待を持たれていますか。

石井 温泉や美しい風景、豊富な食材に恵まれた伊豆は、長い間、黙っていても観光客が来るところでした。それが結局、「自分の地域に観光客が来ればいい」という考え方になり、地域間の奪い合い、競争につながりました。どこも素晴らしい資源を持った優れた観光地であり、誘客についても個々で努力してこまでやってきた。そうした経緯もあって難しい面もあるかと思いますが、地域は電車一本で結ばれているのですから、いろいろな面で協力体制をとっていかねばならないと考えています。

狭いところで競争している場合ではない。観光形態が大きく変化したいま、競争相手は、伊豆以外の他の地域なので、から。「伊豆はひとつ」となって、伊豆圏域で構想をつくり、お客さまに来ていただけるような仕組みづくりが必要です。

一例として、いま静岡県や伊豆半島の



行政などで行っている「世界ジオパーク」認定推進活動があります。伊豆半島は昔、流れ着いて本州にぶつかってきたという話があって、その断層など半島全域に地球活動の見どころがあります。まさに伊豆半島は「ジオパーク」に格好の場所です。

また、温暖な気候の伊豆は、四季おりりの花が非常に美しい。下田には12月から1月の水仙、6月のあじさいがあり、河津や南伊豆の河津桜、熱海の梅、伊東の椿、伊豆市の梅や紅葉、西伊豆のユリ——1年中どこかで花が咲いています。「花半島」というイメージで観光推進ができるのではないのでしょうか。

それぞれの地域に特色があるわけですから、地域ごとにその特徴に磨きをかけて、最終的にはひとつの「伊豆」という観光地としてPRしていく。伊豆の魅力はまだたくさんあるし、さまざまな発信もできる。観光地としての伊豆の可能性は大きいと信じています。

※ジオパーク：地球活動の遺産を主な見どころとする自然の中の公園。地質学(geology)と公園(park)の組み合わせからつくられた。